特42
6
444

白樂天
寒盛
楊貴妃
玉葛
鼎

255
51

樂天

居の法師の賓客向樂

天の公私事也扨も是より東

當つ國あり。名を日本と云

づる。京從さまわり。日本の報

恵をうれたる宣旨を伺き。今

明治
12 18
内交

海路より新作　丹潮出る日の
光の　其方の国を青く
東海の波遥なる行舟の
沿ふ日の影　孤独なる雲の旗手の天
清空に　其方より
吹くもの　日光の

地も高く　海路を
へて　息作猛ふ　日光の
地より高く　指出可き時を知る
日光の　やうと詠めるやと
海作　ぬひの葉蔭の海
の羽ばたき　日の光る　氣高く

白雪天

けつこしてなる湖水満々として碧波天に
とひ〳〵。都を離れ来りて
ゞ。扁舟に棹さゝ
の極の浪のひゞ
きもまことに音面白の海上やな
松浦潟に西に
ゝ有羽の

上京

月の入る雲も浪
なびけるかまくあ
ゝ多くの唐土の船も遠
ゝ。夜泊りと問へる月
も猶多の棹の音も
萬里の波濤を

地もつきぬ是をかなしみ波浪
ぞりぞくまでは涙ぞ流るる
き成ば日本の者り　けんぶと
れば日本の涙流るる俗分
唐の白樂天ぞ涙をまする
ぞ　ぎやうぶ流るる涙なる

と白樂天とうるるとふ俗の歌
了ぬるや　其分は漢出の人
あまぞ君ぞ君はけちぶつ日本
よりやは隠れがゆるる
たちひ其ふる間ゆるたぞと
やうてこそ知ぬるべき事なれも

思ひ入れず　日本の智恵をもて
らんとす。楽天来りて法をもべきと
のぜ　ふ　あ　ま　ね　き　日　の　本　な。西
を　泳　め　て　沖　の　方　よ　り。松　ぐ　る　を
ゆ　ま　ば　人　ど　毎　に。ち　ふ　や　う　れ　ど　ど　と
ら　ら　づ　ら　づ　ら　　甲工寺内　今　や　し　や

松浦毎。沖　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま

にこうゑ　ゆ　ゆ　ゆ

めされて、老翁の心をぢらせ
人なばなる　年　いや其儀ともなる
しかぢたぶ同前の氣らを
詩を作つゆきう。青春夜をれ
びていとほの肩を掛て白雲常
を似て山の腰をめぐる。心はる

る漁舟　シテ　青春　音　おとあるとき　言
の巖の肩よりかくるる夜を似て
まとうや白雲常を似て山の峯
をめぐまて面白しく日本の
もたぐ見ばよ若夜きるる若を
和　中トニ　アニコ中ニ　ナナ　ニニニ　イハ
ニ　ニト　ツ　ニハト到　ニニニニ
ちもなくて。きぬぐ山の常を

和入、訓一一　ワキヒ一一

きるハ　ハ、ぎやふ其分を賜

き風雅あるゞ。ゆく心ある詠寄を

つゝめる。其分はいゝある人や後

シテ

人がすゝやまるもなき者あり

ぢまぎ寄を讀ふ人間のこと

限るべゝ。ぶゞ。まゲる物毎ふ

歌を續ぬふ物を　ワキヒ一一　ゝも

やいきゝ。まゲる物とふ。板ハ島

シテ

おゝ富類まゞ。も　和寄を詠

ワキ

ぎる其ゝ。　和國ゝ於ゝ

シテ

證寄多ゝ　ア寄ハ　ア

ちめる蛙迄。唐ハ出ハ祈ゞ月ふ

ハ　ハ　ハ　

ぬ。弓を捨ひぞ。翁も。大和寺を
ぞ。かりつぐ。讀ありしを。わらぐ
ひ。まの。弓をよ。とくなる。後寺よ
孝經。天皇の。御字かろよ。大和
國。高天寺よ。まむ人の。ぞを。移
ひ。まの。比。新。端の。梅よ。岩ひ。東

入て。鳥。まを。ずば。初陽。毎。卯。末
不相。遠。寺。栖。と。ぞ。文。字。よ。寺
て。見。とられ。ば。三十一。文字の。詠
寺。の。そ。ば。ひ。き。り。初陽の。波
毎。よ。ひ。ま。ま。ば。ぞ。ひ。ぞ。ぞ。ひ。と
ひ。栖。ま。と。ず。と。る。鳥の。詩。と。姫

して。その島より書類のくみぐ
へ。奇とする物多くあり
その海の濱の砂の数とよみ
しいきるわ行きも奇とする也
宮やわ國の風俗の心者
海士べの宮者孤きるべの風

世わ國のもそ拾ひ。わ歌を
いぐ〳〵詠の曲。其名を默
ぢ。そもやぶぐの拾ひそ
やく〳〵小和まる〳〵 誰まると
てもぢ。ぞよ。拾ぶるまるぐ。
詠楽の 報き法の音笛ハ龍

[illegible]
[illegible]
[illegible]

上寺内

うまうまとして明らかに拾へば。伊勢
石清水賀茂の代のたぐひ。鹿島三笠
諏方熱田。安芸の嚴島は神
ぞ。安芸の国の厳島は龍王の姫三の姫
やみて。海上よりあらはれて海中出
とまひ給へば。龍王ふかくそ

宣海よりかへ
きりつ。まひ将ぎよおほ宮ごろも
ぞ。年月神かぐらをぞ。はじめたまへ
る。唐土永ながの。漢武より海の
きり。空の日孤やの。神ときこえ
ぬ。神と君だに代の動らぬ世

二ト二一　甲ト二三五

白菊天

ぞ久し待り

實盛

キサシ　尋ク

出入西方ハ千萬億ガ土過ヘ　ある

る道なれども　コシ　分の泉池の

國貴賤群集　クシン　の移居の拝

ツ　ニ　ニ　サ　ニ　ハ　ワキ

思ふ夜の法の場　宮もまうと

ツレ

よ拾ひ不捨　ヌル　ちりひろ拾ひ

殘るべき　工寺　三人　猶りまをと佛の御名
と尋ねらるべ　ミヲ　ウ　ア　ウ　ア　ウ　ア

ひ寄もつゞいた法の場よりそ
ゞくもや神ゆ一人余釈ろの
拝ひちよ。拾ひ出て羽織
らねゞも老眼の通路おもも
つゞ四のもゞ
い遅く代家と去り生るゞ

やあ母あらぶ仏情いるよ翁扱も
毎日の釈若よ意ると可ば
まゞ老ひ者と父る食よ。れと
ひ沒年ゞのうるると可誰よ
もつて行ゞを中ゞと猪ゞ
審あり。きよおらの名を

なゞ学へ（シテカ）居るもすれば
れ学より一句に有る。鄙
べ為まじ人がおすやうに居もも
らぞ社名学もきめ作る人べ歩
ちゃで向偏よ脇の対面迄為も
ばかりらぞ（ツレイ）まじきーて（ワキ）社称

若時学より達ますうきの浮
むらぐんぎの花ますちえる心
ちまぐ学ぶ（イ）寄分ととえ（ワキ）ぶ
の浪狭よあまるぢまじが社分為
ぐ安楽国よまるかむひの
歓喜とあんぐ食よぷんぬ妄執

の國守の名をば改めらるべきの
ことは情強いとよ　宣と
翁の申給ひしは極きりきの
ぐ〻ぞうつかちの臣心なる
るべしは但おもとが名を変
へ拔かるべきの叶はずき
ゆくりなくいとびとの変人
ちぐはぬ所前なる人をのきき
へぬ迷ひきりをなりの
本より翁の法令の変事
かゆみもだ可堪なる人をぞ
のぐるぞよりて変人

もし長野藤右衛門尉実盛を
討ちたる人あらば合戦を討きぬべ
き及ばれて法師ばらめ
年来家の侍与力の輩を将軍
物語り益体たちとの名を以
宮ゝ（シテ）いかやうにまぎれて其実盛
もし法師ばらめ水を髪髭（チケミヅ　ビンヒゲ）
をも洗ひ白まぎれと
を執心強くきるぞもしあり
其の人よ武者のぐらとも
もとゆ者（ワキ）ともの人なりは
深山（シテ）に（ツレ）ぞ（ツレ）其情とかてぞ（ツレ）

中ニ一ニ一ニ一

うぢ川の間の夢もあり、
現世なりき思ふもの葉糸
川の草堂の家の前さびし
おそるべきて俤初よりあらはれ出る
宮盛ぶるを陳ずなよ
世話もそうづうして哀を立

去て行うとられば葉糸の池の
島めて海はまうまで
ぬしは言ひ　いざ見ぬ時の
移名して俤を
葉糸出ぬ池の島の法のあり
ぬうぐで頼母移名れ老まを

なる夢ひの。初夜よりぼ長夜智
まで。心も西へ行日の光りとゝ
よ曇りまさぬ。鐘をまつ。徳
もまさぐ。南無阿弥陀仏南
無あらぶ仏　極楽世界よゆき
ぬまでぱ。おぐ者界を越ぐ

輪廻の苦鄙。清をぬ歌ぎの
心ぐぐぐぐ。可ハ不退の可命
ハ無量寿仏。頼ぐ。会
ぐ相續ぎる人ハ。ぐ毎ぐ往生
ぎ。ぐ。ぱ。見尾海命
あらぐぐ。ぐ。ぱ。ぐ行世界を

アニ、アヤシテ元ニ戻ス

歌の数よみ侍るべき世をうべしとも

元トヽ　元トヽニ　ニアリシ　ヨミ　上

ありがたや　上

ぎわの花さくしたのひくる池の面は

三、　ヨ

波よりうべすべるものをられば者

つる、弱みるるぶ甲冑を常にまる

シテ　ヨ

つ、ぎ世よ　堀ずの人きをぬ

分と言づ知ぶ心の池のいひ

ぶ、き世の音慶の歌をぶ

ヨキ

かべ、たゞせ給へよ　是猫は

まゝ有る海を塚を人人

シテ

き更は見も物もぶ　恒上

ヨキ

人ゝを明うる　ゝるや海も晴

の雲れ　白き老武去
あまだ　其出空ハて山やゝ
る　桂　月
つまで　燈の陰　周うゝぬ
の錦のひなきみゝ　前黄
白ひの鐘　仏のゝ刀

ゝのゝゝゝ

[illegible]向殺[illegible]新心[illegible]ばらくうと[illegible]ばるる[illegible]
忍ひ[illegible]
[illegible]時[illegible]
[illegible]ことよひ[illegible]遊[illegible]
法[illegible]
[illegible]ぎ[illegible]の物語
[illegible]も昔を[illegible]
[illegible]
[illegible]る藤原の[illegible]卓の陰野の[illegible]
[illegible]
[illegible]

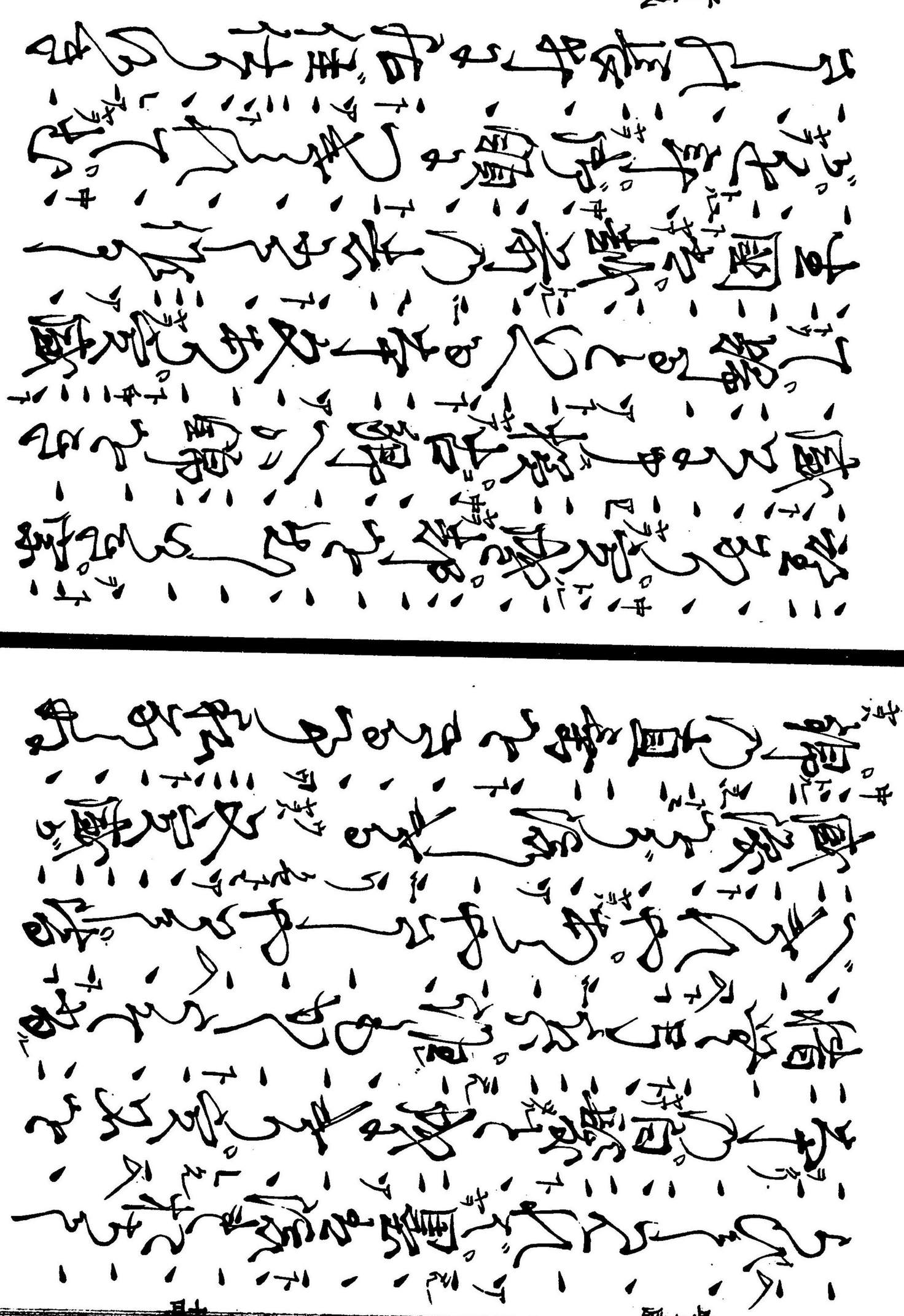
扨も藤原の合戦敗まり一のぶ
深ぎの方より手塚の太郎光盛
丈曾殿の舌前より[illegible]て申模
ぜ盛社寺異の曲者と御で
首をうちとらんまでぐ
ぐ勢も[illegible]ぐ[illegible]と思へば錦

直(タタレ)を寄(キ)るおのもをせ
責れば後はおのづから詳が坂東
ぎ乞ひ申す。水雷艦天晴
長野の神苗宮威すてや
有姿。髭(ゲ)の白髭(ヅル)る
へきぶ黒きうて宮おまし樋口

次郎は見祝(リ)たるうんうと言
もうかで樋口は(ト)月及(ト二)
て涙ぐうんうと言ひ出
おむぶんやおの無禄前(ダル)宮ぐ
(ト中)(中)(ア)(ア)
(イ)るぶや宮威宮る申ふ
(ニ)(ア)(ア)
ぐすは祝(ヅル)て軍を考ばの殿様

とあるちびひろびきをかきつも
あとをるぎなすぬ岩城者うち
海とるぎなすぬ岩城者うち
人ぎよあるまづまつも口清る
ぎをを墨ようめつら
やぎ寄死きべきすぬ常で中
仏しぎ寄ぬ洗いぎ渉

絵はもあべ首をち
古首を空杉あらまる沈他浪
の岩な源ぎ水のぎつも絵
つる柳の忘れ枝まて
乱れて新桜の髪を撫
星氷消て清苔つびぎをあ



世度れ國よりはぐ定
で討死仕るべし。岩坂の思出
思ふらんぞ。先あまとやく
しらば。赤地の錦の直垂を
ぶし給へ。ぬぎ捨ぬ
みもとへぞ。紫とぢつゆきば

物きて。家より帰りて人やらる
後と。續も世年及の心也
ぢもぞ。古赤。東買殿。錦の
狂とを。秘る。歌。今の宴
感。名を。國ちまるはげち
くれ。おうち。号代。来代

よ者の門の同じく懺悔地
[illegible]
[illegible]
[illegible]
心の水の底きよく濁りを強
[illegible]
[illegible]
[illegible]
道めぐりて又家に帰る。其夢と
[illegible]
[illegible]
[illegible]

中ニ二二二

と、あつまりたる人の、
歌もかのこちもあき
あとの月をも、形を、南殿の桜
伝へ、帰りて、さぶらひ、
らひて、なびき、
楊貴妃

わかれすぐ、
道をいづくと尋ねる　見る
唐土の宣帝は仕へ申す方
士みて、扱みも我君まつごと
なぐ、ます、面を中ふを

れたる艶を專らに治まる
よる。容色殊に双び無く美しくとり
まし。楊家の娘なるにより
其名を楊貴妃と号す。後宮
だに比ぶる細あるべし。言葉巧に
てしたひ申て作。なりは寿歌

を始めぐ泥眼のあるかを
尋てしまれいの宣旨を伺ま
上碧落下黄泉まで尋申
さるも更に魂魄のありかを去
らざる。哀み末遂に家宮まで
ぞ猶。此度遣はす宮みと云

ゐ寿ねゆ。まばらもが
つるもの。たまのあま
かもうらと。信濃とか
て行舟のほつるなみ水の
ひ。草れうり紙の枕ゆ。寿世
の國は。きりうは。息は

猶ほ遠蓬宮よりいと高きは。洲可な
う来寿びやとなは。有数
ほ隨遠蓬宮よきこれ
ず。宮殿ぐ。ぐ。そて交な
島際もも。荘厳ぎそて
ちるぐ。七宝とちばめり

漢宮萬里の粧ひ長生殿の
夜半の樹も是よりふかき
ゆめ覺めて見れば可
なる叡慮宮中をとられ
ば太眞殿に額ゐらるまたる
宮あり世に可なる俳徊と

ゆゑなくやさなる作
昔は殿の園なりもふ
詠めて見の色ぶかきる
なるひろ今は草莽の秋
の洞なり猶なる月陰もぬ
ろがほなる枝のれあ惠

（唐の玄宗の勅の使方士を迎へやる）

唐の玄宗の勅の使方士を迎へやる

（女）何ぞ此方士を迎へ給ふ。

（唐帝の使）ふ。何しふ家よ。

（女）九花の帳を押のけ立ち

来れるぞと。

（唐帝の使）ふ。何しふ家よ。

（女）雲の鬢づら

花のかんばせを

（唐帝の使）ふ。何しふ家よ。

（女）物きざたる

古眼のうるはしき涙を落べさせ

（唐帝の使）ふ。何しふ家よ。

（女）梨花一枝の雨を帯び

なるよりほひの美容のうるはしき

（唐帝の使）ふ。何しふ家よ。

（女）玉楼中央の松

ユトニ　　　

痛い苦しうう作へ　文行　六
ゞゆゞゞ今ふひあさ
乃露のみもあねたまの
まうと思ふ寿行ゆゆ行
き似たまゆゆ
りどきかまゞ
あゞゆゞ役

乃風ハ枕めゝ　イト
やゝとたゝ　トウ　ヲ　トウ
の意　レウシヨ
慕の涙旧国を思ふ況ゝ　中ウイ　トウ　タマシイ
抱しも当べきゆゝねゞ意　ヲ行
帰まゝ春宮ゝ去なゞ　ヲ行
昔乃物とゝび行へ　文行　見法
まゝかゝよゝて思ひもゞ　シモ

しそうに出でて方士みあまをくべ
きれば　半行　いやはやよ見ハ世の
中よ　ぞ　ひ　ぞ　ぐ　ぞ　ぐ　ぞ　ぐ

とひろかなよ伝くるやたちめぐるか
まぜとらひしるもるぶるれ
上京内
たちまぐるも世平歩流結主
死ひるるひるるる其ゆい馬鬼よ
留りたまるふ位宮よ生りつ
ひ城も家とらひ将胡とかし

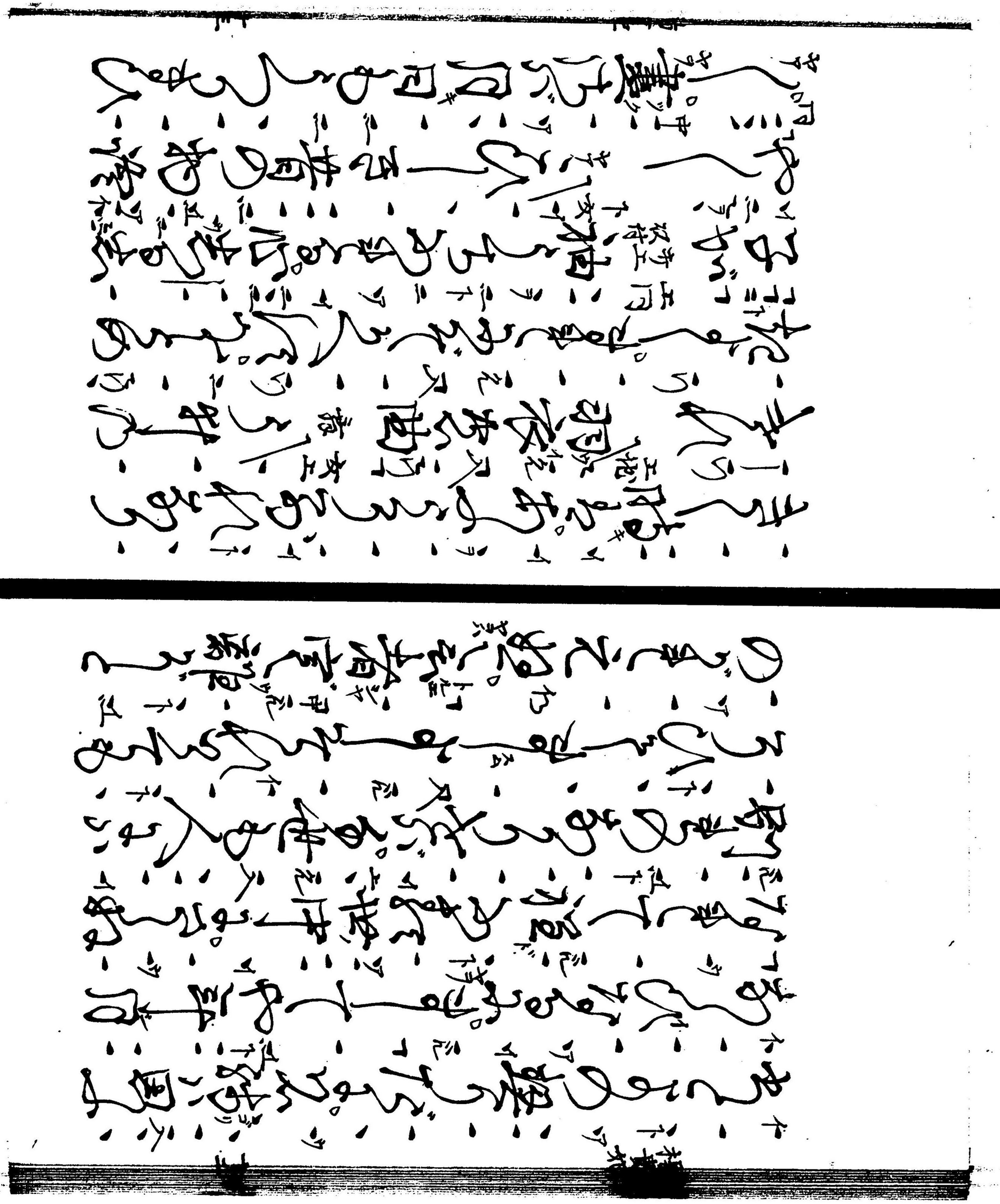
き蓮理も枝打てるるまるを
と言ぎ世同心のゆ色ふ
ぐ紅ひあ人を頼むぞと語
ぶ泣へや たちばとひて出
毎ひ伸ひ中ひ泣たち国ぐら
きたちの粒いるあんるの心

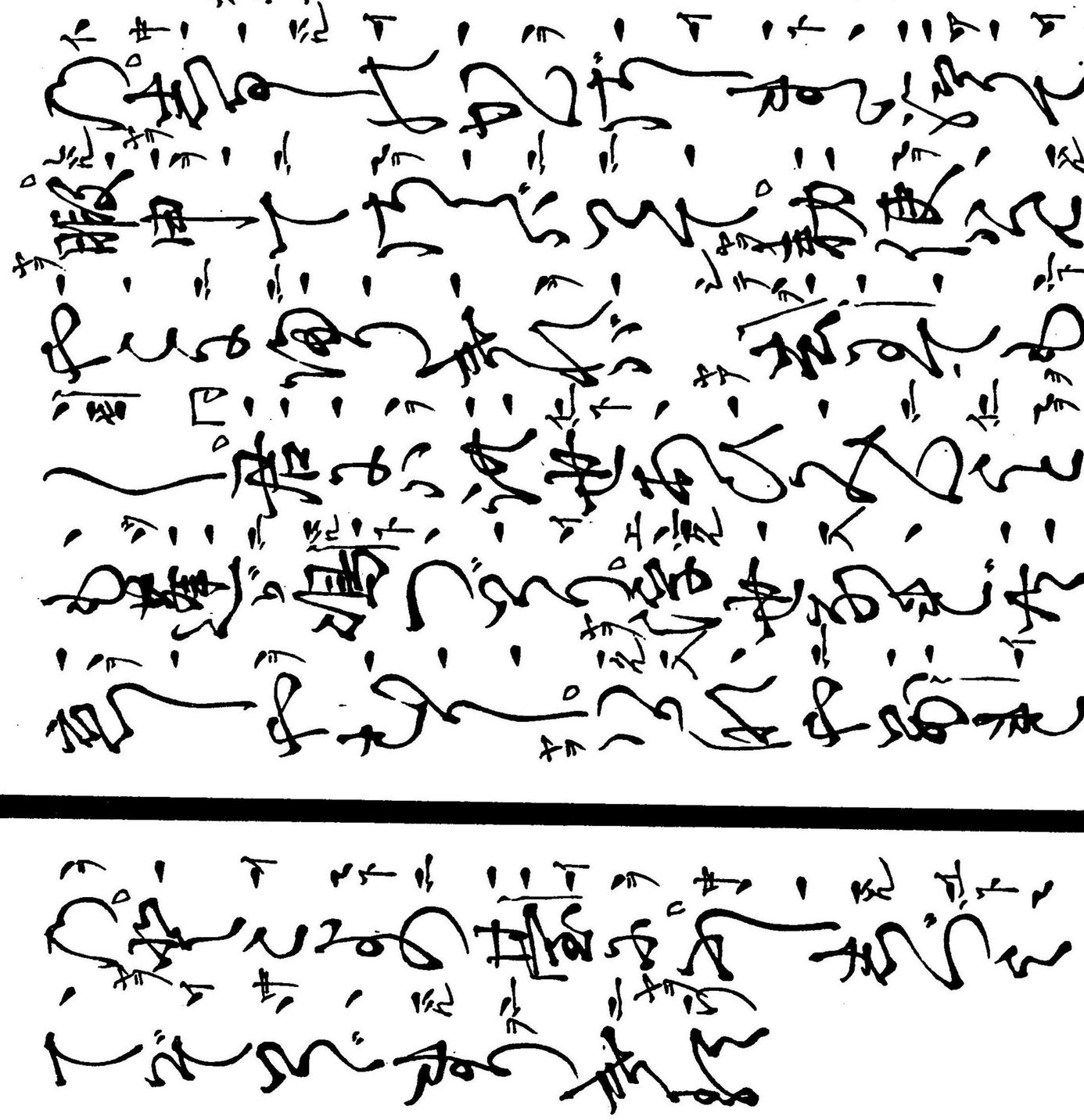
上女 秋はすゑ　行ゆくみちの草の
ぐりあはむ　とも思はぬ身なれ
ばぶ　ぶ　まぐ　まこと　草やいふ
をあまぐ　ぐ　エ地　宮や　ゆ　ゆ
宮のうち　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
曲　女　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
上女　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

地 又　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
上女 さて袖の　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
地 ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
上女

と言ひしかども、やうの姫と言ひつべき未
来永劫に流れ流れて、拾更なる生死の海の
中に、
紀ふ二十五者の
うち、仏法者滅のうちに
まつ先に天竺の五衰よ
り、須弥の四州の接ぎよ、四州の
を手つかふ朽ぬ いとんや者
少不定のうち、歌きの中の
ぎきうちに、我もそのかたへ
界の諸仏、けらるる昔のちまた
のうち、人界よりまれにて
楊家の深窓に養はれ、

人ありて、君聞きつけ給ひ
ぎめ出でたる宮仕へ
人、惜しき同穴
きぬまでいたづらに
ぞ思ひ侍りしまさ
恋おぼえたる
まことふみあひてなり。好き語
きこえもせ
る出でば限り
日の光君と
の世界まで
もづ
深の





寄

萬

見る諸國一見(ケン)の僧まうは我
汝猶小南(シン)都よりはひ〻。靈(イ)佛(合)
雲社(イ)跡(セキ)をまぐまめぐまう
ぬ文見より初(ソ)頼まうでと志(シ)
て作(ヨウヤ)ま(アートル)ぬ(ーーーー)ぬ(ーー)ぬ(ーー)ぬ(

宮の吉とうぢ。鳥つぐきく
行末は猟よ寺の。ぐらぐ。ぢの
吉ちやこ梅の枝ぶ幸行ぞ
猫もあつぷ。ちきぶ行ぞ
夏。
袋作猫よ初瀬川な
袋よは心報ぶ来信ゆ。ちぐぞ

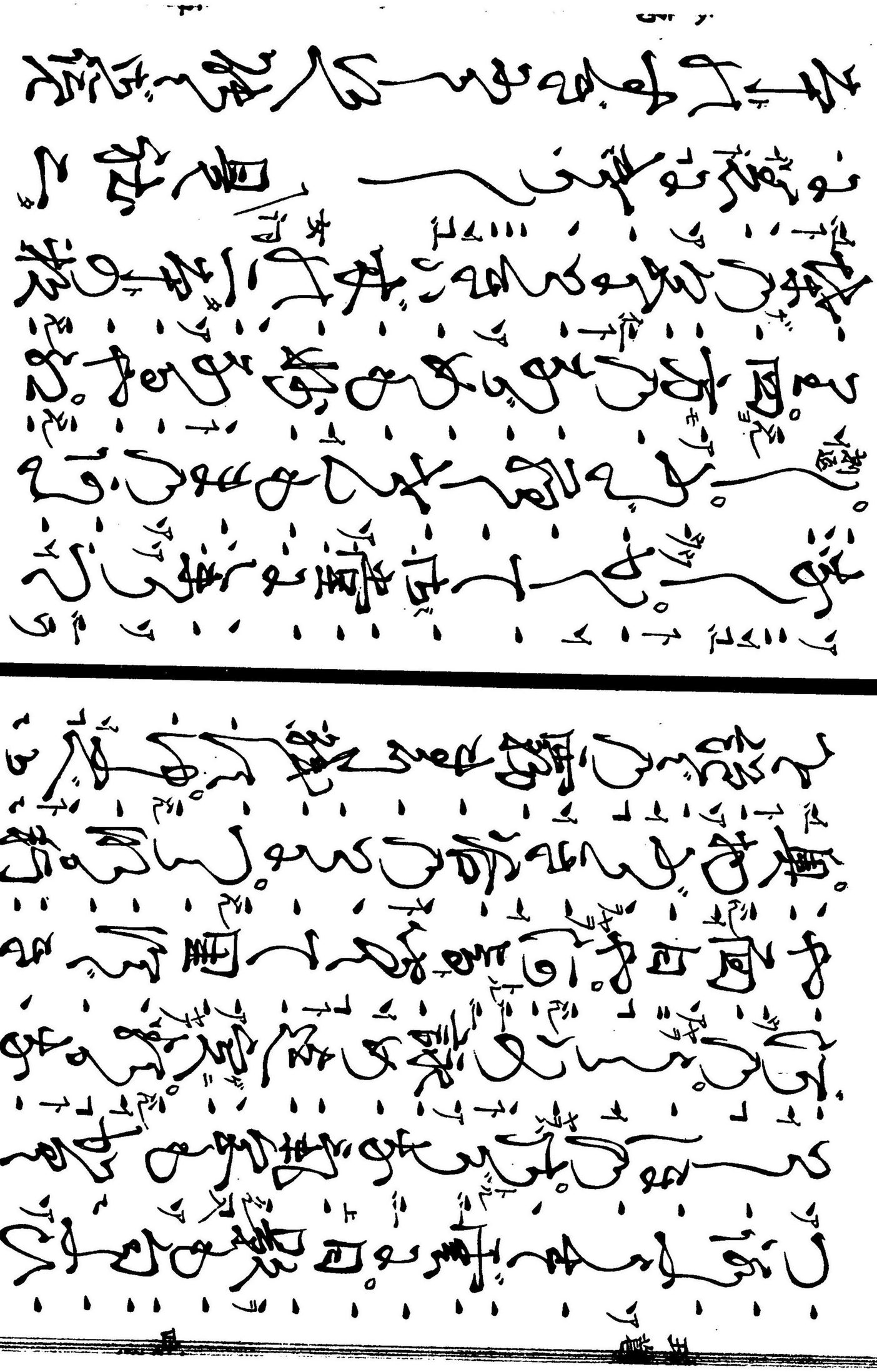
猫もあき。毎の海
りや初瀬のぐりねる。き
しきか。新べも猫とらとと
かはぼ鳴の浦やぎよ恵堂
てぐれきよ者いりへ先
ぐそもいぎや白浜のぐるべい

づぞ心の同のぶらはかそらと
ぞそもまゝ
なまを様子も袖の玉のを
上方
暮てゆく秋の浪の村時雨
又
浦の野べのさびしくも人やなる
浦の根の浮毎の根をる
そつまるかれ
早行
みぢやを沈きびけ
流くさもみぎるい
面づひとちいちをを様
人をられ女ぞ御
いちる人をます面そ

文治

見しも山初瀬寺より詣でくるあり
あり。又山川可うつろふ流きる
る海士おぶねぞ漕きつれと憤ゝと
中ニ
きる。其河の邊の江すゝ有るふ
ぶ賣おぶねぞ漕ぎとよ　哀
面白うとゞ紫やおぶ哀あ面おぶ

初瀬うふ。山きまうめうとゞ紫
まるべ。其おぶ。又其まうも
浪おぶ。うつ謂うあるや浪
いやいぶうるうれすも。出ゞ浪
ぎよ初梅ま　その又ぶ。いろ
ぶ。まぐのうつきぶ。ぶもら



人（ロキヲ）備き二（タ）ヤの枝すてゆく
きるぞや。二（タ）ヤの枝ばかりぞ
と尋ぬ。古（ル）ものぐさ君とて海
しやとふ。行（ク）と續きたる古寺
まるぞ見ぬ。見ぬ。実（キ）ぬ
みなむ葛の門（イ）侍ぬ初瀬な

猪で行くと。石色そろへ見
ありて續く寺なり。世（ヨ）を経
と思ひて古跡を弘法ひ法
ひとへ。実や有。世を経ゆ
良の窟のみけ。湯の跡中
くみ行ぬ。との所見もう

りコ サシ女 玉葛

あそ犯国るの五葛ぞの者
ーーー

ぎ。国つよりる方もまゐ。かくて
都の中そそ。然からきたる毎
のうちぶをやうきめをあるる
ば陸奥まどへる。くちらつ
きも。きくぬ分の猩を。国歌き
てゆきぶやゆ。国家の文和歌
や。唐土迄も。国やあるぞつきの
寺よ信でつく。守もへぬいの
るちぎりふ初瀬の尾上の達れ
よりよのく。国歌の詠の人
よ二度ふ。京の松の葉ぶを
つねぶふる川のくと詠きる。き

元久二

ふの道にも入れるを分を思へば
法の家出ぬ。ぬるぶ玉葛。ぶ
を聞くに。ぶへや。宮ぶ
拭ぬ。ぬ涙もこそ。ぬるも
きる水の。ぬ衣。ぬ。あそれ。ぬも
思ふ。ぬ。ぬ。ぬ初瀬川。早くも知

る。ぬ法。ぬ。ぬ。ぬ縁。ぬ。ぬ。ぬ心
ぬ。ぬ。ぬ。

[illegible]
[illegible]
[illegible]

黒かみの　あねやいつのね乳き
ぐし　むすびてゆ。思ふ事
宮妻執の雲霧ふり。逢ひも
すやらかくきる。人を初陳ふみ
ゐ。ぬ。ぎ。おちて。露も涙も
散ぐふあきの月も。朽果ねら

らめやうく。人をも世をも
恨ふ人をも世を。思ふもの
分きてつの。報ひの界や。数
つきるる。立も盛衰の書模
ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ひよむ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。

玉葛

を出るはとゝなるまでにめぐるも
ゑにあるまとつる。あやまれもすまや堀
やとゝ。法華執をひるがへて心ふ
ゝれの玉葛。心を真如の玉ぐ
ちぐさの夢ぬ覚ゆ哉

融

昔日

昔ゝ東國方より出ふる僧
ありて。北末都をたづぬる程な
く。陸奥国立松原なりける国
ふつ心ぐ出ぬべ雲と分。海路
とゝ海りゆくとそ。国も同ど

秋の家年ばかるる。きるやうを
ば堀竈の。ほもし。都のとまつの郭
秋きまつば身をば既に。老のちな
まつとちきぐ書とりの文
つとりぞきぬる弁月の。書
とむへ秋とうへ時雨る松の風

とも秋身のうへと汲ぐ。堀
初衣袖さもいぬ。蒲の秋の。浦
いふ見る周防内
身は汐あり。さ夜ば汐
汐可の堀汲みて
寒は海をみて。もあるよ。堀汲

ハ誤りたるか射殿　あり行くも
あり。法家とぶらくとき
めされて行ぞ　汐可とぶ古際
河系院と弦原　河系
院弦塩ぶ海の浦ぶよ。融の大臣
陸奥ノ子賀ノ塩がまと。都の

中ノ移されて海島ゑまもぶ名
よ流またるかりみんけ。河
にあるもの池水とも自の家
塩ぶ海の浦ぶ入るまもぶ塩汐と
ど知ぶ知ぬぶ　完陸奥
ノちれ塩竈と。都の中ノ

ちまたなる家々には佛もあれ
ども人離れ鳴いろ　はんばのまて
独離れが海ばかりよ。蛙の大臣者は
御母とよ。今まで府酒宴の遊
詳様ぎ。可ぐわ。やの月と
そ出でくく　宴を月の出では

ぞやのはまぐりが鳴れ森の梢へ
よ。鳥の宿　作りて出でんまう
作る月景色もこ出でる海へ
身の上うや。思出れて作
作と共今の面前の者ぞ
ぽ僧の御ん分よ出でまとぽ居

も貫潟ゝて後や法ゝ島ゝ宿ゝ
池平ゝ樹ゝ僧もたゝゞ
ゝゝとまもたゝ
ゝゝ古ゝの心ゝ目前ゝ秋ゝ
ゝゝ上寺内ゝ
ゝゝ宮やゝ
ゝゝ塩竈ゝ浦ゝ秋も

ゝゝゝゝ上ゝゝ松ゝ立ゝ霧
ゝゝゝ前ゝ潟ゝ
ゝゝ昔ゝ跡ゝ陸奥ゝ浦
ゝゝ城ゝ詠ゝ浦ゝ
ゝゝ塩ゝ宿ゝ都ゝ中
ようさまなる調ゝ

清滅の大臣（シテノ）は宮ゝ（ヲトド）みちのくにの塩竈の浦（テウバウ）を
ゆき過ぎ給ひ。汐干の潟を
まをらつ。あの海人ども
浦すもの日ごと毎ふ海（ウミヲ）を汲（マ）き寄せ
て堀を焼（カ）きつ。（ゼル）まぎれ遊ぶ

ぶりつゝ汐ぶ絞まで出でたる海人相
續して絞ぶ人もあり。けまぶ浦
を出でゝ行（ヒ）く。（エヒ詞）ゆく（チ）海（ウミ）（ヲ）過ぎ
ぬ。ぬ。ぬ。

[illegible]
[illegible]る計あり。ちまぶ奇なる君
[illegible]
まさぐ煙絶えみ塩ぐ海のぞ
[illegible]
林樹もみな濃るかと貫之も
[illegible]
あづめそ行く　[illegible]　宮や絵もまぐ
[illegible]
月のそなてる塩がまの浦さみ
[illegible]
しくも哀そ　[illegible]　うる波の世迄も

法師なりて。老の涙もくるれば
[illegible]
浪。哀昔恋しや　[illegible]　恋しや
[illegible]
し。老へぐも歌をぜひもま
[illegible]
ぎ出の浦を見鳥言とのぐ鳴ぐ
[illegible]
程なり　[illegible]　いふ財殿ぞ
[illegible]
わりなるぞ　[illegible]　い清ぐ可ぞぞ

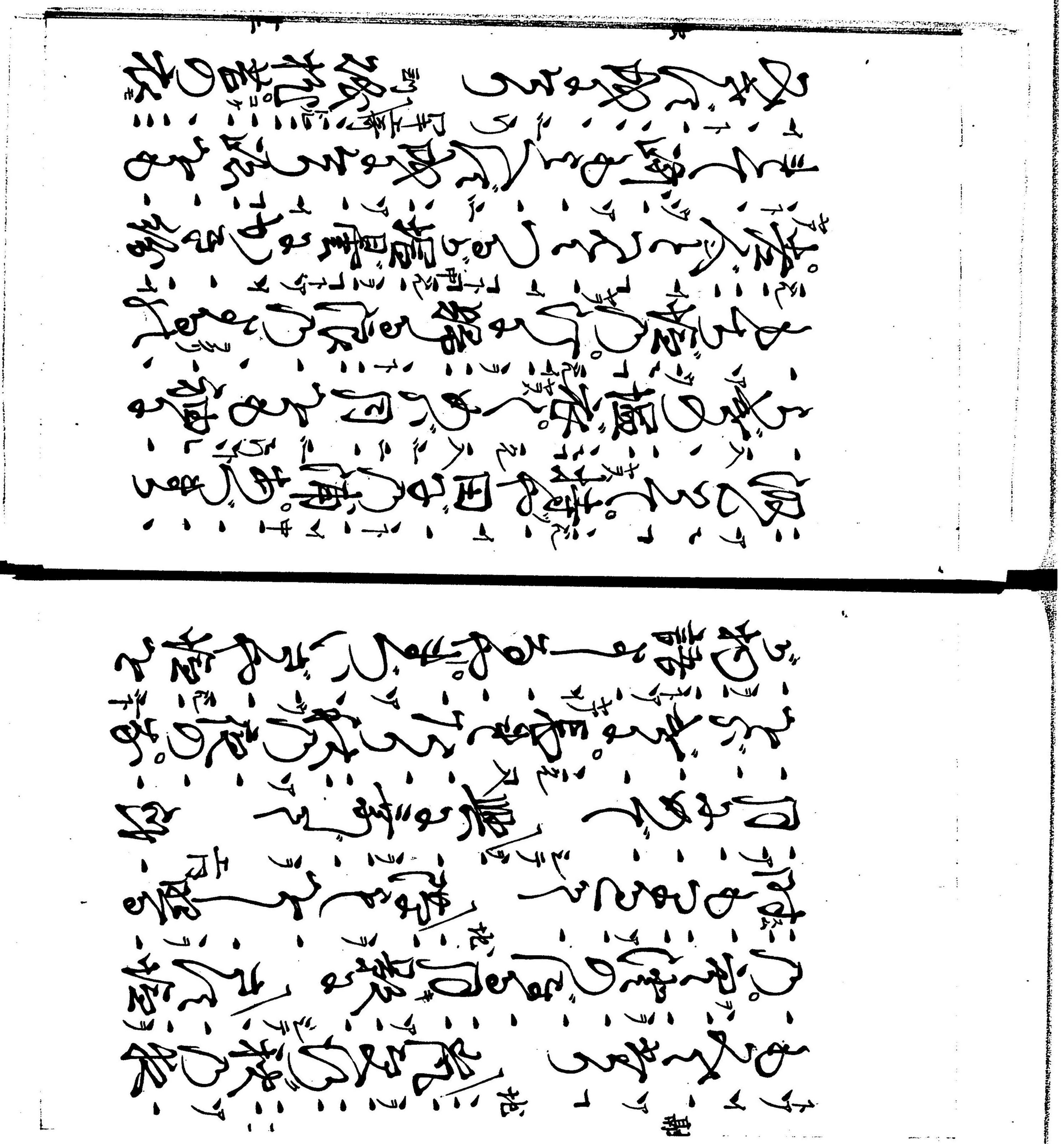
は法師にて　　なほ
ゐ奇なる。古語ゐ教中ぐ
（平）
ぬぞあまみ人くたるい音羽やまゐ
（シテ）
けんぐあまし独言羽みゐよ　言
羽山音よ清つ逆坂門開のこ
ゐまと清たまぢが逆坂も猛
（シテ）
色よ独ゐうめ　伝ぐうう開
（シテ）
ゐとゐみくい讀たまぢ。ゐゐ
なるゐまぢが逆坂のゐい言羽
（モ詞）
の考みかゐ。ゐ見ゐうゐ
（ワキ）（ワキヤ）
ぬゐゐ扱言羽の嶺
（ミチ）
ぽ弟ゐ
（ナミ）（イ）

を待つ淀へ　詠つも捨てぬ云
の柴の寺の中の清閑さと越
野とはあまぐつ　枝葉末
よつぐきたる星　村の森のこぐち
そまを去るべくもなくよずず
秋の時雨の秋あまぐ　紅葉も青

きいろみ　月も蒼行雲の
ちの梢も青き秋の色　今
そそ秋よ名ゆ　村ぶ雲が紅
し夜の森　みぐられ雲も陰
青き野よりつぐ　ちくふ
つのま　野べの秋風

月よ去て　鶏なる
深夜かな　夜情の伏見の行
田院島羽もくらしや　詠め
やるすまの空の白雲のでや
暮そむる吉野の嶺も未深
くてたるい成可なるる

あまた社大そうや　かの垣のもも
ふそてのぢ花ぢ　うめつめ　粉
しろふ粉雪や　ゆきつきても
秋の月　夜方あ　や岩つき面
みそゆるい行ぞ　秋もてや
ぱ半みきり　松の尾の月みる



をかしきさまにて。岩根の床
よ夜もすがら。松も寄枝をみる
やうて。夢待宵の旅寝かな
[ほしテエ]
[illegible]まて。月をまつ。ものをぞ思ふ
[illegible]へよ海る浪のうち。垣竈のう
らびの。ひの目を陸奥のち

[illegible]
[illegible]せぬ。其名を
[illegible]大原。[illegible]
[illegible]浦よ心をよせおの
すぐるなの松陰よ。月ぞ海
を。俗へ。月宮殿の。殿の白衣の袖も。三五
夜中の新月の色ぞちらるや

雪をとりて雪の油　さまの桂
の枝をよりて花をとりて粉
ひ　寒のもりふ白の浪の
蓋面白や曲水の面ぶらぶら
遊舞の袖　舞中上　あら面白の遊楽
やそも明日の其中ふまず初日

の雪ぶる。歌もなまあまい
いらまる謂なる後　出ハ西尚
ふ。日出いまず　色ぶ新
よかくはるぶ　ぶ
もすぶらぶ
青陽の土の姫　震む

べの表は　藍の色は三月の
空をながめたるやうに　又水
中の花菖蒲は　紫と雲
上の蓮は　白と陰とも変く
一輪も　万水もとゞ
鳥は池鳥の樹に宿り　鳥
下の波はゆるもあゞ　地
秋の花は　鳥も　地
雲も　同も　地
おさゝ四方に　雲と　地
ある。池は陰は　たそかれ　月
の都は　治まる

十五終

明治卅九年十二月十五日印刷
同　卅九年十二月廿九日發行

版權所有

東京市牛込區新小川町二丁目十番地
訂正者　觀世清廉（電話番町三百十六番）
京都市二条通麩屋町角十二番戸
發行兼印刷者　檜常之助（特電話二千百九十番）（振替貯金三五五貳）